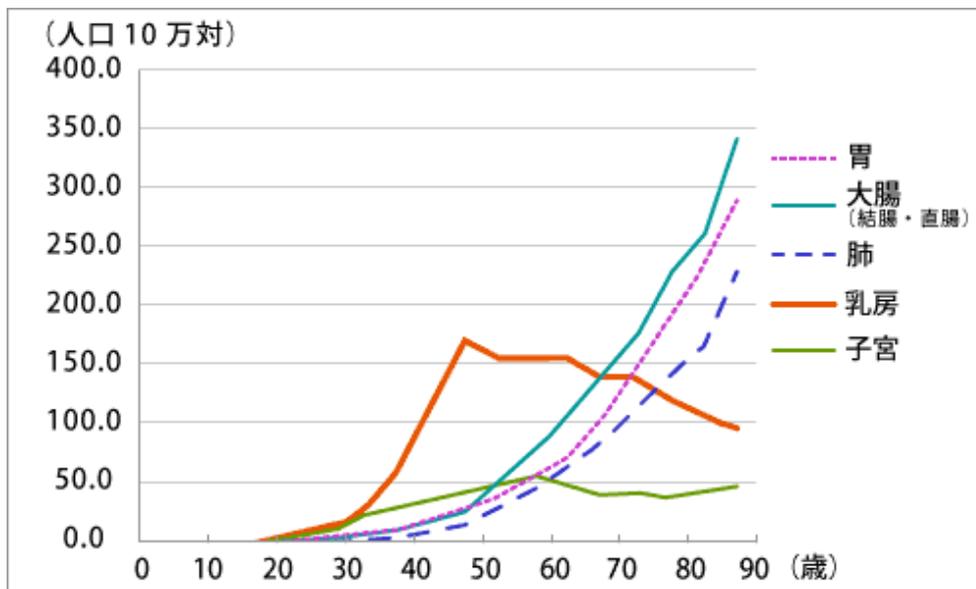


乳がんの最新統計と乳がんに関わる検査

日本人女性の11人に1人。女性のがんで最も多いのが乳がん

現在、日本人女性の乳がん患者は急増しています。1999年には、がんになる女性全体の中で、乳がんになる人は胃がんを抜いて**第1位**になりました。生涯に乳がんになる日本人女性は10年前には20人に1人とと言われていましたが、現在では**11人に1人**とされています。



女性の部位別がん罹患率(2013年統計)

年齢別に見た場合、胃がんや肺がん、大腸がんのように年齢が高まるとともに増えるがんとは異なり、乳がんは**30代から増加しはじめ、40代後半から50代前半にピークを迎えます**。20代で患う人もいますので、若い時から関心を持つことが大切です。

誰でも乳がんになるリスクはありますが、以下に当てはまる方は特に乳がんになりやすいとされています。

1. 初潮が早い
2. 閉経が遅い
3. 出産の経験がない
4. 高齢出産経験がある
5. 家族に乳がんの人がいる
6. 良性の乳腺疾患の既往がある
7. 子宮体がん、卵巣がんの既往がある
8. 長期間ホルモン補充治療を受けている



超音波検査



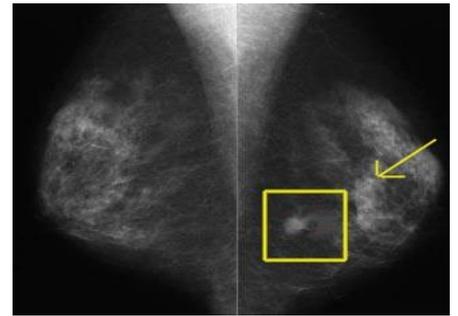
マンモグラフィ検査

乳がんに関わる検査

乳がん検査において重要なのは、**問診（家族歴や既往）、視診、触診**です。そのほかどんな検査が診断から手術、手術後におこなわれる検査の一部を紹介します。

◆ マンモグラフィ検査

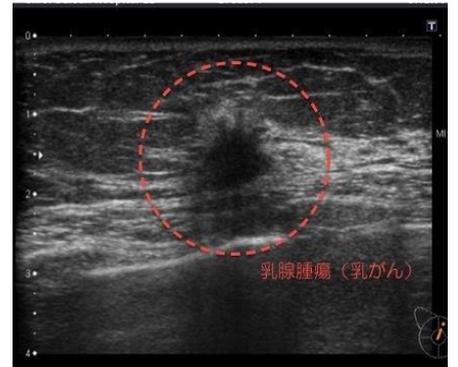
乳房を挟みながら圧迫して、撮影します。
触ってもわからないような**早期の小さな乳がん**はもちろん、しこりを作らない乳がんを白い影（腫瘍影）や**非常に細かい石灰砂の影（微細石灰化）**として見つけることができ、悪性の病気だけでなく、良性のものも見つかります。



マンモグラフィ画像

◆ 超音波（エコー）検査

ゼリーを塗った乳房に直接「プローブ」という器具を接触させ、超音波の反射の具合で、腫瘍の有無、形状を見ます。被ばくがないため、妊娠中でも受けることができます。また、**若年者の乳がん発見に適している**という特徴もあります。しかし、小さな石灰化を見つけることは難しいです。



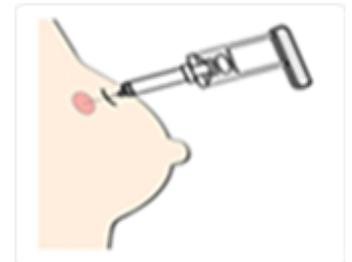
超音波画像

◆ 細胞診

超音波で位置を確認しながら、乳房のしこりや分泌物などの細胞の一部を注射器で採取して顕微鏡で調べる検査です。

◆ 組織診＜針生検（はりせいけん）＞

超音波で位置を確認しながら、細胞診よりも太い約2mmの針を刺して、広範囲の細胞を含む組織を採取して顕微鏡で調べます。



細胞診・組織診

◆ CT（コンピューター断層撮影）検査

X線によって体を輪切りにした状態の画像を見ることができます。造影剤を使用することでがんの広がりや転移がないかを確認します。

◆ MRI（磁気共鳴画像）検査

磁気を利用して画像を描出します。造影剤を使用し、がんの形状や広がりを確認します。放射線被ばくの心配はありませんがうつ伏せで検査を行い、検査時間がCTに比べて長いです。

◆ 術後検査

手術で切り取った組織を顕微鏡で見ます。この結果から、これまでの検査結果と合わせて乳がんの種類が判定され、その後の治療（乳がんの術後療法）が決定されます。

◆ 定期検査

乳がんの手術、治療後には医療機関で定期的に検査を受け、経過観察を行う必要があります。定期的にマンモグラフィ撮影や超音波検査、CT検査、血液検査を受けます。



早期発見・治療によって生存率は高まります！

編集者：JA静岡厚生連 清水厚生病院 放射線科

